

オック語におけるプロパロキシトンの解消について*
 Eliminacion de l'accentuacion proparoxitonica en occitan:
 per sincòpa o per apocòpa?

多賀吉隆
 Yoshitaka TAGA

0 はじめに

「男」と「女」の違いを考えてみよう。

ラテン語ではそれぞれ, HŌMĪNEM, FĒMĪNAM と後ろから3番目の母音が強勢をもつプロパロキシトンであるが, 多くの現在のロマンス語では, プロパロキシトンを後ろから2番目に強勢をもつパロキシトンへと変化させている。例えば, フランス語では, *homme, femme*, スペイン語では, *hombre, hembra* “雌”のようにである。これらの言語では, 後ろから2番目の母音を消す語中音消失が行われている。

それでは, フランス語とスペイン語の中間に位置するオック語ではどうなっているだろうか¹。

対応する形は, *òme, femna* l. [fɛnno], pr. [fɛmo] である²。

これらの例のように, オック語では, 大部分の単語は次の強勢規則に従い, ラテン語のプロパロキシトンは, パロキシトンになる³。

$$(1) \quad -\acute{V}C \left(\left[\begin{array}{c} +\text{syllabic} \\ -\text{tense} \end{array} \right] \right)$$

さて, *femna* は明らかに語中音消失が行われた形である。しかし, *òme* は次のような派生があるため最後の母音を消す語末音消失が行われていると考えるべきである。

- *òme* “(配下の)人” + *-atge* → *omenatge* “臣下の礼”
- *òme* + *-às* 拡大辞 → *omenàs* “大男”

オック語では, 次のようにプロパロキシトンがパロキシトンへと変化した。

1. 最後から2番目の母音が消える語中音消失 *SŪBĪTUM* > *sobte* “突然な”
2. 最後の母音が消える語末音消失 *RĀPĪDUM* > *rabe* “すばやい”
3. 強勢の移動 *LACRĪMAM* > *lagrema* “涙”
4. 最後から2番目の母音の半母音化 *EBŌRĒUM* > **eborium* > *evòri* “象牙”

この論文では、語中音消失と語末音消失がどのように分布しているかを扱う。強勢移動は例外的・散発的な現象であるため、考慮にいけない。また、半母音化は、子音の弱化がそれほどはなはだしくないオック語では、母音衝突の場合に実質的に限られるが、子音の口蓋化、強勢母音の二重母音化などの複雑な問題が絡み、この論文の範囲を越える。

なお、均質な資料をえるため、現代オック語のラングドック方言 (lenguadocian, *l.* と略記)、およびプロヴァンス方言 (provençau, *pr.*) を主に分析し、古オック語 (ancien occitan 11世紀から15世紀, *a. oc.*) は、援用するにとどめる。

1 記述

分析の対象になるのは、ラテン語で次のような音形をもつ単語である。

$$(2) \quad -\check{V}_3 C_2 \check{V}_2 C_1 V_1 \left(\left\{ \begin{array}{c} S \\ M \end{array} \right\} \right)$$

ここで、下付き文字は、繰り返しを意味せず、区別のための単なる添字である。

以下、 V_1 、 C_1 、 C_2 によって分類して、語末音消失か、語中音消失かを記述していく。

1.1 $V_1 = A$

語末母音が-Aの場合、男性形の影響、強勢移動がなければ、語中音消失がおこる。

- ANĪMAM > *arma* “魂”，
- MANĪCAM > *marga* “袖”

文法性により曲用する場合、男性形からの類推により女性形がつくられる場合がある。まれに、逆に女性形からの類推で男性形がつくられる場合がある。

- TĚPĪDUM ~ TĚPĪDAM > *a. oc.* *tēbe* ~ *tēbeza* > *pr.* *tēbe* → *tēba*, *l.* *tebés* ← *tebeša* “なま暖かい”
- SAPĪDUM ~ SAPĪDAM > *pr.* *sāde* ← *sāda* “風味のある”

1.2 $V_1 = E, U$

1.2.1 $C_1 = T$

語中音消失がおこる。

- SABBĀTA > * SABBATUM > (*dis*)*sābte* “土曜日”

- MÍMĀTUM > *Mende* “マンド（地名）”
- HŎSPĪTTEM > *òste* “（客に対して）主”

1.2.2 C₁ = D

語末音消失がおこる。

- CANDĪDUM ~ CANDĪDAM > *a.oc. cande ~ candeza > çande → çanda* “純白の”
- ĪASPĪDEM “めのう” > *jaspe* “ヤマカガシ”

1.2.3 C₁ = N

語末音消失がおこる。

- RHŎDĀNUM > *Ròse* “ローヌ川”.
- JŪVĒNEM > *jove* “若い” → *jovenàs*.

1.2.4 C₁ = S

見つかっている例は、ケルト語の強勢の位置を保つ例外的なものしかないが、語末音消失がおこる⁴。

- NÉMAUSUS > *Nime* “ニーム（地名）” → *nimesenc* “ニームの”.

1.3 C₁ = P, B, M

語中音消失がおこる。ただし、見つかった例は、C₂がNだけである。

- SĪNĀPEM > *serbe* “辛子”.
- CANNĀBEM > *çambe, çarbe* “麻”.
- MĪNĪMUM > *mërme* “ほんのわずかの”.

1.4 C₁ = C

語中音消失がおこる。V₁がUの場合、口蓋化がおこるため、単なる語中音消失ではないと考える人が多いが、見つかっている例はすべてC₂が歯音なので、調音点が部分的に同化されたと考えるべきである⁵。

- FĪLĪCEM > *feuse* “シダ”.
- QUINDECIM > *quinze* “15”.
- PŌRTĪCUM > *pòrge* “ポルティコ”
- VIĀTĪCUM > *viatge* “旅行”
- MĒDĪCUM > *mètge* “医師”
- MŌNĀCHUM > *mōnge, mōrgue* “僧侶”

1.5 C₁ = G

例は少ないが、語中音消失と語末音消失の両者が見られる。

- ASPĀRĀGUM > *espargue, espàrec* “アスパラガス”

1.6 C₁ = L

語末音消失と語中音消失の両例が見られるが、語末音消失の方が多いようである。語末音消失の例は次の通りである⁶。

- CONSŪLEM > *cònsol* “執政官”
- PRŌTĒLUM > *PRŌTĒLUM > *pr. pròda, [pródq], l. pròdol* “繫ぐもの”
- CŪMŪLUM > *pr. cómol, comol* “絶頂”

語中音消失は例は次の通りである。

- AVŪNCŪLUM > *oncle* “叔父”
- -ĀBĪLEM > *-able* “-できる”.

語末音消失と語中音消失の両者が見られるのは次の通りである。

- HĀBĪLEM > *qule, àvol* “抜け目がない”.
- *TURBŪLUM > *treble, trebol* “濁った”.
- SĒCĀLEM > *pr. seque, l. segle* “ライ麦”.

1.7 C₁ = R

語中音消失と語末音消失の両者が見られる。Rの場合、例の多くが動詞の不定形であるため、類推による形である可能性がある⁷。

1.7.1 C₂が単子音でB, V

語中音消去がおこる。この場合、子音が二重母音の要素になっている。

- BĪBĚRE > *bēure* “飲む”。
- VĪVĚRE > *viure* “生きる”。
- RŌBŌREM > *pr. róure, l. roire* “オーク”。

1.7.2 C₂が単子音でM, N

語中音消去が生じる。[+nasal]rの子音連続がおこる場合、渡り子音が生じることもある。

- GĚNĚREM > *genre* “種類”。
- TĚNĚREM > *tendre* “柔らかい”
- NŮMĚRUM > *nombre* “数”

1.7.3 C₂が単子音でB, V, M, N以外の場合

語末音消去と語中音消去の両者があるが、強勢をもつ母音が二重母音である場合、ラテン語において長母音であった場合は、語末音消去の例が見られない傾向がある。

- VĪDĚRE > *VĪDĚRE > *vésere, veire* “見る”。
- MŌLĚRE > *mòler, mòlre* “粉をひく”。
- CĪCĚREM > *cese* “ひよこ豆”。

強勢母音が長母音、二重母音の場合は次の通りである。

- RĀDĚRE > *raire* “髭を剃る”。
- OCCĪDĚRE > *aucire* “殺す”。
- RŌDĚRE > *roire* “かじる”
- CLAUDĚRE > *CLAUDĚRE > *claire* “閉める”。

1.7.4 C₂が子音のグループの場合

今のところ見つかっているのは、子音群の一番目の要素が、S, R, N, Lであり、二番目の要素が、D, C, Gの場合だけである。

二番目の子音がDの場合、語中音消失がおこる。

- PERĎĚRE > *pěrdre* “失う”。
- TONDĚRE > *TONĎĚRE > *tondre* “毛を刈る”。

二番目の子音がC, Gの場合、語末音消失がおこる。

- NASĎĚRE > *nàisser* “生まれる”。
- VĪNCĚRE > *vénser* “勝つ”。
- CARĎĚREM > *carce* “牢屋”。
- FŮLGŮREM > *FŮLGĚREM > *fólzer* “雷”。
- PĪNGĚRE > *pénher* “描く”。

2 分析と考察

2.1 記述のまとめ

語末音消失が起こりうるのは、V₁がE, Uで、少数の例外をのぞいて、C₁がD, N, L, Rの場合になる。

Dは、母音間で、D > δ > zのような変化をしているので、語末音消失をした場合、D > δ > ∅のように変化をし、V₁および、V₂の消失が問題になっている時期では、δであったと考えられる。これは、Tが弱くなったdと対立する。

Nは、単語末では、現在の表記ではntと書かれ、中世では表記上区別なくnと書かれた-NTを起源とするものと対立する。ラングドック方言では、語源を意識して、nt, m, nhと書かれるものは、語末で硬口蓋鼻音で発音されるのに対し、nは発音されない⁸。

Lは、パロキシトンの場合、LLと対立する。プロヴァンス方言の一部では、PALUM > pau ≠ CABALLUM > cavalのような違いが生じる⁹。

Rも、同様にRRと対立する。

そこで、この子音のグループは、[-tense, +coronal]ととらえることができる。

したがって、R, Lの場合、明確な音韻法則ではなく、傾向であるが、語末音消失する場合は、次のようにまとめることができる。

1. V_1 が, E, Uであり,
2. C_1 が, [-tense, +coronal]である。
3. さらに, C_1 がRの場合,
 - (a) C_2 が, wになるB, vや鼻音でなく,
 - (b) C_2 が, rd, ndでなく,
 - (c) 強勢母音が二重母音やもと長母音でない。

語中音消失をするのはこれ以外の場合である。

2.2 理論付け

上のような語末音消失と語中音消失の対立はどうして起こったのであろうか。

伝統的には, 下降強勢と再上昇強勢の違いと考えられている¹⁰。強勢を \acute{V} で, 副次的な強勢を \check{V} で表すとすると, 下降強勢とは, TÉPIDUM > *oc. tèbe* のようにだんだんと弱くなっていくもの, 再上昇強勢とは, TÉPIDUM > *fr. tiède* のようにいったん弱くなり, 再度強くなるものである。

しかし, 2.1のまとめにそって, V_1, V_2 に副次的な強勢を割り振るのは, 不自然ではないだろうか。

2.2.1 ラテン語の強勢規則と強勢前の語中音消失

ラテン語の韻律音韻論による強勢規則は, 簡略化すると次のようになる¹¹。

- a. 韻律の単位は, 音節である。
- b. 最終音節は, 韻律外である。
- (3) c. 重い音節には, 行1にマークを付ける。
- d. 行0のマークを2個以下からなるグループにまとめ, 左側のマークの上にマークがくるように右から左に処理する。

上の規則で, 行1にマークが付いている音節が強勢をもつ。なお, d. はかなり普遍的なものと考えられている。

具体的には, 次のようになる。< * >は韻律外であることを示す。

	1	*	*	*
(4)	0	(*	*)(*)	<*>
		ve-ri-ta-tem		fe-mi-nam

これは, Darmesteter の法則を正しく予測する¹²。語中音消失が「強弱強」の「弱」が消失すれば, *veritatem* > *vertat* “真実” のようになる。

2.2.2 下降強勢の unnaturality と「弱弱」からの母音消失

TEPIDUM に下降強勢と再上昇強勢をラテン語の規則のまま付加してみる。

(5)	1	* *		* *
	0	(* *)<*>		(* *)<*>
		te-pi-dum		te-pi-dum

左側の下降強勢は、韻律音韻論で許されない構造である。

(*)と<*>をとりあえず区別しないことにして、下降強勢の RAPIDUM と再上昇強勢の SUBITUM がともに許される構造になるとすれば、つぎようになる。

(6)	1	* *		* *
	0	(*)(* *)		(* *)(* *)
		ra-pi-dum		su-bi-tum

このような構造をつくるように規則を書くのは不可能ではないが、このように似た音形に対して違う扱いをすることの unnaturality は否めない。

そこで、V₁とV₂が韻律についてはともに弱いと考えざるをえない。この場合、どちらかが消失するための相対的な強弱は、音節の構造によると考えられる。

V₁の位置では、A > a, E, U > e のように、V₂の位置では、A, E, I, O, U > e のように弱化しているので、e は対立がより中和された音であり、母音としての「強弱」は、e < a である¹³。したがって、V₁が、a になる場合、つまり、A であれば、V₂が消去される。

V₁とV₂が、ともに e である場合、つまり、V₁が E, U である場合は、子音によるしかない。

通常、パロキシトンでは語末母音が E, U の場合、BONUM > bon のように消失するが、PATREM > paire のように、残るものがある。これは子音に支えられているからである。逆にいえば、子音に支えられない、弱い母音が消失するということになる。

したがって、VC\$e\$Ce であれば、語中音消失が、VC\$(C)eC\$e であれば、語末音消失が起こる。普通、前者の方が、自然であるが、語頭にたてない[-tense, +coronal]という子音で次のようなフィルターがあるとすれば、R 以外は例外的なものをのぞき説明できる。

$$(4) \quad * \left[\begin{array}{c} +\text{coronal} \\ -\text{tense} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +\text{syllabic} \\ -\text{tense} \end{array} \right] \#$$

R の場合、二重母音やラテン語における長母音の問題、子音が二重母音の第 2 要素になる問題がからみ、残念ながら、まだ説明できていない。いずれ改めて扱いたい。

【注】

- (*) この論文は、日本ロマンス語学会第32回大会（鹿児島経済大学1994年5月21-22日）での口頭発表に基づくものである。席上、事実面で菅田茂昭氏、大高順雄氏、理論面で川上茂信氏より非常に有益なご示唆をえたことを改めて感謝する。
- (1) この論文で記述したことの多くは、隣接するカタロニア語にもあてはまるが、カタロニア語は、ラテン語からの借入語を中心にプロパロキシトンをもつ。例えば、カタロニア語では、*síl·laba* “音節”である。一方、オック語では、強勢の位置を後述の規則(1)にあわせて、*sillaba* とする。
- (2) 簡便のため、ラテン語を SMALL CAPITAL で、語中音消失の形を *italic* 体で、語末音消失の形を roman 体で表すことにする。表記は、現代語では、オキシタニストの正書法を用いる (Lafont 1971, 1972)。なお、強勢母音は、アクセント記号がつく場合は、アクセント記号のつく母音である。アクセント記号がつかない場合は、本来ない弁別記号をつけて、*ÿ*, *ÿ* のように表すことにする。一方、古オック語の表記は、Lévy(1973)に従うことにする。
- (3) Bec(1973), pp.55-58 参照。
- (4) Anglade(1921), p.126 参照。
- (5) 同じ現象は、フランス語にもおこる。Fouché(1961)を始めとして Zink(1989)まで細部には違いがあっても、フランク語の *waddi > fr. gage, oc. gatge をモデルに /-dye/ に帰着しようとする。しかし、c, g が A の前で口蓋化を起こさない南部のオック語では強勢の前での語中音消失で次のような対立がある。CARRICARE > *cargar* ≠ VINDICARE > *venjar*。
- (6) これらの例も強勢規則(1)に従っている。強勢移動が行われた、**çomol* > *comol* のような例は明かであるが、*cómol* は、[*cúmu*] や [*cúme*] のように最後の子音を発音しない。Lafont(1972), p.55 参照。
- (7) 動詞の不定形の -ar, -er では r が発音されない。したがって、*véser . l.* [*bése*] などは、やはり強勢規則(1)に従う。
- (8) nh は元は軟口蓋鼻音である。
- (9) Lafont(1972), p.54。
- (10) 例えば、Lausberg(1965), pp.154-155。

- (11) 韻律外 (extrametricality) については, Hayes(1982) 参照。この定式化は, Kenstowicz(1994), p.574 による。
- (12) Anglade(1921), pp.117-118 参照。
- (13) V_2 の位置で, àvol などでは, o も現れるが, -vol, -mol の環境のみに現れ, *-vel, *-mel なので, この環境での異音と考えられる。

【参考文献】

- Alibert, Louis. (1965) *Dictionnaire occitan-français*, I.E.O.
- Anglade, Joseph. (1921) *Grammaire de l'ancien provençal*, Klincksieck.
- Bec, Pierre. (1973) *Manuel pratique d'occitan moderne*, Picard.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968) *Sound Pattern of English*, Harper and Row.
- Fouché, Pierre. (1961) *Phonétique historique du français: les consonnes*, Klincksieck.
- Fourvières, Xavier de. (1975) *Lou Pichot tresor*, Aubanel.
- Hayes, Bruce. (1982) "Extrametricallity and English Stress.", *Linguistic Inquiry*.
- Kenstowicz, Michael. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell.
- Lafont, Robert. (1971) *L'Ortografia occitana*, C.E.O.
- (1972) *L'Ortografia occitana: lo provençau*, C.E.O.
- Levy, Emil. (1973) *Petit dictionnaire provençal-français*, Carl Winter Universitätsverlag.
- Lausberg, Heinrich. (1965) *Lingüística románica: fonética*, Gredos.
- Mistral, Frédéric. (1932) *le Trésor du Félibrige*, Delagrave.
- Zink, Gaston. (1989) *Phonétique historique du français*, P.U.F.